

芥川龍之介『おしの』論

——キリスト教的救済への道程として——

奥田雅則

序

芥川龍之介『おしの』は、一九二三年（大正十二年）四月の「中央公論」に掲載された短編小説であり、後に彼の作品集『黄雀風』（大正十三年七月 新潮社）等に収められた。

この小説は、芥川文芸における所謂切支丹ものに属する作品であるが、他の切支丹ものに含まれる作品と比較してみても『おしの』を論じた研究は少なく、例えば、早くに吉田精一が、

「おぎん」は切支丹物であるが、これは作者の興趣のゆたかにもられたものとはいいがたく、題材とまともにとりくむだけの気魄を欠いて、単なる逆説の面白さに逃れている。作者の時折試みる知恵の遊びにすぎない。同じことが「おしの」——「黄雀風」に収む——にもいえる。この頃の彼は、この種の題材に以前のように熱情を以て喰い入ることが出来なくなつて来た。

と評し、「或程度の効果を収め得る為にのみ、この種の世界を利用するという趣が強い」「マンネリズムに落ち入つた作品⁽¹⁾だとしたように、或いは佐藤泰正氏も、『おぎん』（大正十一年九月「中央公論」）との比較のうえで、「作者主体の衝迫を伴わぬ作意の思いつきのみが眼につき、「詩的精神の浄火」は見るべくもない。」⁽²⁾と述べているように、『おしの』という作品は、これまでの研究史においてあまり評価されてこなかった作品であると言つてよいだろう。このような低い評価の背景には、稲田智恵子氏⁽³⁾も指摘しているように、

僕は千九百二十二年来、基督教的信仰或は基督教徒を嘲る為に屢短編やアフォリズムを伸した。しかもそれ等の短編はやはりいつも基督教の芸術的莊嚴を道具にしてゐた。即ち僕は基督教を軽んずる為に反つて基督教を愛したのだつた⁽⁴⁾

というような芥川の言説の影響のあるものと思われる。確かに、作中で十字架のイエスを「臆病もの」「見下げ果てたやつ」だと断ずるしの姿は、一面的には基督教を「嘲る」という類のものであったとも言えなくはないであろう。

しかしながら、『おしの』一篇は、はたしてキリスト教を「嘲る」ような小説でのみあつたであろうか。例えば、近年の研究においても、戴煥氏は、

人間の惨めさと愚かさを冷徹な目で見つめてそれを描きだしながらも、人間のボロボロな誇りを神の前に捨てられない芥川だからこそ、「臆病もの」のイエス、「臆病ものを崇める」宗教を嘲りながら、なぜかそれに関心を寄せずにはいられなかっただろう。「おしの」一篇は、芥川のこういう心境を物語っている。⁽⁵⁾

と述べており、『おしの』一篇よりキリスト教に関心を寄せてゆこうとせずにはおれない芥川の姿を見出しているのである。そのようにして見るならば、作中のしのがキリスト教を拒むのと同様に、芥川もここでキリスト教を撥ね付けているのだというのではなく、むしろ関心を寄せながらそれを凝視せんとする芥川の姿の方こそが注目されるべきであり、『おしの』一篇もこのような視点でもって評価されねばならない作品であろうと思われる。

さらに先程の引用箇所に見られた「千九百二十二年」、即ち大正十一年ということを関連させるのであれば、すでに拙論で触れたところではあるが、芥川が大正十一年に描いた『神神の微笑』（大正十一年一月「新小説」という小説は、キリスト教に対峙し、神へと問いかけてゆく芥川の姿を暗示した、その契機とも位置付け得る作品であつた⁽⁶⁾。『神神の微笑』をひとつの契機として、芥川はより深く、そして真剣にキリスト教を眼差してゆくのである。そのような意味でも、その翌年に発表された『おしの』は、キリスト教的世界の拒絶ではなく、神へと真摯に問いかけてゆく芥川の、それからの姿を示した作品であるとして捉えておくべきであろう。『おしの』一篇には、後年にキリスト教へと深く関わり関心を寄せてゆく芥川の、大正十二年という地点におけるキリスト教との対峙の仕方、その在り様が表れているのである。

一、

『おしの』は、佐々木家の浪人一番ヶ瀬半兵衛の未亡人であるしのが、その息子新之丞の病を治してほしいと南蛮寺の紅毛人神父を訪ねるといふ筋の小説であるが、ここで注目すべきは神父としのの問答、その在り様であろう。神父としのの両者に関して、河泰厚氏は、

両者は思いも、理解も、立場も何ひとつかみ合っていない。作者はその両者のやりとりを殆ど滑稽と言わんばかりに、ひややかに突き放して描いてみせる。(7)

と述べているのであるが、はたしてこの両者の隔絶の語るところとは、如何なるものであろうか。神父、しのの両者の側から考察を試みたい。

さて、『神神の微笑』にあつては「オルガンテイノ」という實在した宣教師を登場させた芥川であつたが、『おしの』にあつてそれは「紅毛人の神父」としか書かれてはいない。だがしかし、その両者の認識は、意外にも根底で通じているように見える。「オルガンテイノ」との比較から、まずは神父に関して考察を試みたい。

「お氣をつけなさい。観音、釈迦八幡、天神、——あなたがたの崇めるのは皆木や石の偶像です。まことの神、まことの天主はただ一人しか居られません。(後略)」

*

「まことの神をお信じなさい。まことの神はユデアの国、ベレンの里にお生まれになつたイエズス・キリストばかりです。その外に神はありません。あると思ふのは悪魔です。墮落した天使の変化です。(後略)」

例えば、右に挙げたような神父の言葉に端的であるように、キリスト教を唯一のものだとする認識である。『神神の微笑』のオルガンテイノもまた、「泥烏須に勝つものはない苦」だと言い切っていたが、「紅毛人の神父」も同じくして、「ただ一人」のキリストを説くのである。「観世音菩薩！ この言葉は忽ち神父の顔に腹立たしい色を漲らせた。」とあるような箇所などは、そのような神父の意識を端的に表わしてきていよう。神父は「ただ一人」のキリストを信じるが故に「腹立たし」さを隠さないのである。

女の声は落着いた中に、深い感動を感してゐる。神父は愈勝ち誇つたやうにうなじを少し反らせた儘、前よりも雄弁に話した。

また、右の箇所に見られるような神父の態度は、「この国の霊と戦ふのは、思つたよりもつと困難らしい。勝つか、それとも又負けるか、——」と語り、布教活動を「勝つか、それとも又負けるか」というある種の対立構造を以つて考へていたオルガンティノにも通じていよう。ここにも『神神の微笑』から引き継がれた宣教師の姿が垣間見えてゐる。

さう云ふ薄暗い堂内に紅毛人の神父が一人、祈祷の頭を垂れてゐる。年は四十五六であらう。額の狭い、顴骨の突き出た、頬鬚の深い男である。（中略）

堂内は勿論ひっそりしてゐる。神父は何時までも身動きをしない。

*

女はさも珍らしさうに聖水盤や祈祷机を見ながら、怯ず怯ず堂の奥へ歩み寄つた。すると薄暗い聖壇の前に神父が一人跪いてゐる。

*

神父の声は神の言葉のやうに、薄暗い堂内に響き渡つた。女は眼を輝かせた儘、黙然とその声に聞き入つてゐる。

そのようにして見てみると、右に挙げた箇所にあるように、小説では神父の周囲の薄暗さや静かさが繰り返して語られてゐることに気付かされる。このような筆致の為され方の示すところは、まさしく「何の理由もない憂鬱の底へ、沈んでしまふ」と語つた『神神の微笑』の「オルガンティノ」の姿と同質のものだと言えよう。それ即ち、

日本に潜む「造り変へる力」なるものとの対峙の在り様である。布教者が直面せざるを得ない「造り変へる力」、それと如何に向き合うかというテーマは、『おしの』一篇にも確かに引き継がれているのである。

つまり、『おしの』における神父とは、『神神の微笑』の「オルガンテイノ」が直面した問題意識を、ほとんどそのまま担われた人物であるとしてよいだろう。そしてそのような意味で、『おしの』における神父としのの問答は、『神神の微笑』での「オルガンテイノ」とこの国の霊の一人だという老人との問答との、その地続きのものである。

ただし、「オルガンテイノ」と「紅毛人の神父」の両者にあつて見逃せない差異が、「オルガンテイノ」が日本という土地に潜む「造り変へる力」なるものを突きつけられることによつて、その認識を大きく揺さぶられていたのに対し、「紅毛人の神父」は何ものにも阻まれることなく、彼の信じる「ただ一人」であるキリストを説いているという事実である。それ即ち、神父の語るキリストの生涯である。曹紗玉氏も神父が語るキリストの生涯に関して、

しかししのへの神父の教えを見ると、芥川がどんなにキリスト教教理を理論的にはよく知っていたかがわかる。

として、「芥川がキリスト教の核心を突いた知識を持っていることがわかる。」⁽⁸⁾と述べているように、ここには豊かな聖書知識に支えられた芥川のキリスト教理解の在り様が示されている。芥川が自ら死を選ぶその直前に書かれる『西方の人』（昭和二年八月「改造」）、その原型とも言い得るような神父の教えは、やはり着実にキリスト教的救いの世界へと至らんとしている芥川龍之介その人の姿を十分に窺わせよう。

そして、このことに『神神の微笑』において描かれた、日本に潜む「造り変へる力」なるものを突き付けられ、そ

の認識を揺さぶられていた「オルガンテイノ」の姿を併せて鑑みれば、そこから一年を経て、ここでの「紅毛人の神父」が、本来のあるべきキリスト教の教えを必死に説くという姿の示しているところとは、やはり日本という土地固有に根差すよう「造り変へる」というのではなく、キリスト教信仰の中核、或いは本質をしつかりと掴み取らんとした芥川の意図とも言うべきものを伝えたものではなかったか。確かに神父のしへの態度は、厳格でありまた、頑なであるとも言うことができようが、それだけに芥川のキリスト教への対峙の仕方という点においての、その真摯な在り様の証左でもあったと言いうことができよう。

二、

「はい、少々お願ひの筋がございました。」

女は慇懃に会釈をした。貧しい身なりにも関わらず、これだけはちゃんと結び上げた髻の頭を下げたのである。神父は微笑んだ眼に目礼した。

*

しのは力の及ぶ限り、医者にも見せたり、買ひ薬もしたり、いろいろ養生に手を尽した。しかし少しも効験は見えない。のみならず次第に衰弱する。その上この頃は不如意の為、思ふやうに療治をさせることも出来ない。

続いてしのの側であるが、作中で繰り返される右のような筆致は、しのの生活の貧しさを窺わせる。さらには、これにしのが未亡人であるという事実も加味すれば、彼女の窮状は想像するに容易い。

「いえ、あなた様さへ一度お見舞ひ下されば、あとはもうどうなりまして、さらさら心残りはございません。その上はただ

清水寺の觀世音菩薩の御冥護にお縋り申すばかりでございます。」

*

「あれが噂に承つた南蛮の如来でございますか？ 倅の命さへ助かりますれば、わたくしはあの磔仏に一生仕へるのもかまひません。どうか冥護を賜るやうに御祈禱をお捧げ下さいまし。」

さらには、右のようなしのの言葉の示すように、彼女にあるものは息子の命を助けてやりたいという篤志の一念である。勿論、しのは作品末尾に至つては、十字架のイエスを「臆病もの」「見下げ果てたやつ」だと断じてしまうように、「日本人の女」「武家の女房」としての矜持の持ち主であることは確かである。それでもやはり、彼女の「わたくしはあの磔仏に一生仕へるのもかまひません」等の言葉の真意を汲むのであれば、しのという人物は、貧しさに身をやつしながらも息子の命の無事を願うひとりの「母」としての存在であると捉えておくべきであろう。

これらの示してきているものは、しのの弱者としての側面であろう。この点に関しては後述するが、このような小説においてのしの弱者としての描かれ方とは、まさに彼女の信仰の獲得の可能性を示唆するものであり、同時に、一人の人間が一つの信仰を選び取つてゆくことにおいて、しののキリスト教信仰へと至り得る可能性の、その一端を表わしたものであったと言えよう。

女は「靈魂の助かり」を求めに來たのではない。「肉体の助かり」を求めに來たのである。しかしそれは咎めずとも好い。「肉体」は

「靈魂」の家である。家の修覆さえ全ければ、主人の病も亦退き易い。（中略）この女を此處へ遣はされたのも或はさう云ふ神意かも知れない。

そのようなしのの心情は、例えば右のような箇所に見えよう。「靈魂の助かり」と「肉体の助かり」という対比がなされているが、やはりしのは「肉体の助かり」というただ息子の無事を願うばかりの存在なのである。このようなしのの姿の示してきているものとは、宗教の等価性であろう。キリスト教への入信をためらわない口振りの彼女でありながら、「その上はただ清水寺の觀世音菩薩の御冥護にお縋り申すばかりでございます」とも言っている。つまり彼女にあるものは、言わばご利益信仰とでも言うべきようなものであり、それはさらに言うならば、日本的な汎神論ということになる。先に触れた神父の例と同じくして、しのという人物は、『神神の微笑』の老人の浮き彫りにした問題を引き継いだ人物なのだと見做し得るだろう。

だがしかし、しのに関して踏まえておかねばならない点として、彼女が「靈魂の助かり」、即ちキリスト教的信仰の世界へは未だ踏み込むことすらしていない人物であるのだということである。

女はさも珍らしさうに聖水盤や祈禱机を見ながら、怯ず怯ず堂の奥へ歩み寄つた。すると薄暗い聖壇の前に神父が一人跪いてゐる。女はやや驚いたやうに、ぴたりと其処へ足を止めた。が、相手の祈禱してゐることは直にそれと察せられたらしい。

そのようにして見れば、例えば右のような箇所に見られるような、彼女のキリスト教への殆んど無理解とも言つてよいような描かれ方や、或いは先に見られたような「あれが噂に承つた南蛮の如来でございますか？」というようなしのの言葉も、まさしくそのような彼女の姿を裏打ちしていよう。

結果から見れば、しのは「武家の女房」たる矜持によって、即ち彼女の日本的価値観によって十字架のイエスを撥ね付け、それに背を向けてしまうということになる。それは例えば、河村清一郎氏が、

死をかえりみぬのが武士の精神であるとするならば、そのけなげさが、おしのの考えも支配しているのだ、と言えよう。そうした彼女にとって、十字架上の、イエスの苦悩や懷疑は、臆病や意気地無さのしるしとしてしか映らない。(9)

と述べているように、或いは、建田和幸氏が、

神父が人間の罪の浄化を基本的な理念として語っているのに対し、しのは、キリスト教の救いに、恥、という武士道の理念を持ち出している。この罪と恥の差異こそ作者の意図したテーマではなからうか。(10)

と述べているように、武士道という日本の精神とキリスト教的精神の対立ということになろう。しのが日本の精神の持ち主であり、小説に現れたその精神とキリスト教との相剋に関しては勿論否定すべくもないのだが、しかし、もうひとつ見落としてはならないのは、彼女はいままさにキリスト教との出会いを果たしたところであって、未だキリスト教の世界には踏み込むことすらしていないという事実なのである。

三、

では、しのが未だキリスト教的世界には踏み込むことすらしていないのだという事実が語るところとは、どのようなことであろうか。先に確認されたように、神父の語るキリストの生涯の、その描き方における理解の深さという点に芥川のキリスト教への真摯な対峙を見出すとすれば、その神父の教えを「眼を輝かせた儘、黙然とその声に聞き入」るしとは、ここでキリスト教の本質と向かい合わんとしているのだと言えよう。

「(略) エリ、エリ、ラマサバクタニ、——これを解けばわが神、わが神、何ぞ我を捨て給ふや?……」

神父は思わず口をとぎした。見ればまづ着になつた女は下唇を噛んだなり、神父の顔を見つめてゐる。しかもその眼に閃いてゐるのは神聖な感動でも何でもない。ただ冷やかな輕蔑と骨にも徹りさうな憎悪とである。

だがしかし、神父の説教が十字架上でのキリストの叫びに至つて、しのの態度は一変する。しのは「世にない夫の位牌の手前」という「武家の女房」としての矜持から、キリストを「臆病もの」だと断じてしまう。このようなしのの姿には、先に触れたような日本の精神とキリスト教教理とのある種の相容れなさが根底に潜んでいようが、さらに、例えば関口安義氏が「ここには弱さを知らない人間は、しよせん宗教とはかわりがないものだとの問題提起がある。」⁽¹¹⁾と指摘しているように、或いは樋口紀子が、

彼女がかかえている「弱さ」や「罪」を真剣に見つめる「強さ」があれば、彼女も「肉体の救い」を超えた「魂の救い」にたどり着くことができたかもしれないのである。そして、これは私たち一人一人に対して芥川が問いかけている課題であるとも考えられる。⁽¹²⁾

と指摘しているように、人間の抱える弱さという問題があることも見逃せない。そして今まさにキリスト教と対峙するしのの姿とは、この人間の弱さというものを如何にして引き受け乗り越えてゆけるのかという問題をも浮き彫りにしていると言えよう。

そのような意味で、ここでの神父の説教が「エリ、エリ、ラマサバクタニ」というキリストの十字架上での叫びで中断せられているという事実は重要である。曹紗玉氏も「もう大正十二年の『おしの』を書いた時点からこのキリス

トの言葉に芥川が関心を持っていたことがわかる。」¹³と述べているように、ここには既に死の直前にあつて「我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう。」(『続西方の人』)と記さずにはおれなかつたやうな、十字架のイエスを深く眼差し、クリスト教的救いへと接近してゆこうとする芥川の姿があるのである。

それにも拘らず、芥川は神父に「エリ、エリ、ラマサバクタニ」の真意を語らせていない。しのの退場によつて、それは打ち止められる。それは一見クリスト教の拒絶というように見受けられようが、ここまでで確認されたように、ここで芥川はしのと同様にしてクリスト教を撥ね付けているというのではないのだとするならば、ここで最も重要視されるべきは、芥川が、この「エリ、エリ、ラマサバクタニ」の直後に神父に語せようとしたものではなかつたか。換言すれば、それは芥川が窮状にあえぐしのにこそ聞かせようとしたものである。

後に芥川は『西方の人』のなかで「エリ、エリ、ラマサバクタニ」は事実上クリストの悲鳴に過ぎない。しかしクリストはこの悲鳴の為に一層我々に近づいたのである。」と記し、また『続西方の人』(昭和二年九月「改造」)では「我々はこのおほ声の中に或は唯死に迫つた力を感じるばかりであらう。」と記している。十字架のイエスの叫びに目を向けずにはおられない芥川の、その心情が語られているのであるが、先述のように『おしの』の時点で既に彼が十字架のイエスをしっかりと見据えていたのだとするならば、『おしの』のこの場面においても、もし説教の中断がなければ、神父は必ずやこういった心境をしのに説いてみせた筈である。つまり芥川は、人間の弱さという根源的な問題において、弱き者が十字架のイエスを目を向けずにはおれないという、クリスト教信仰の最も中核であるところの事実、しのを至らせないまま退場させているのだと言えよう。

そのようにして見れば、神父としののどうしようもない隔たりを描いた『おしの』一篇における芥川の試みとは、

キリスト教信仰の可能性を否定しているというのではなく、勿論キリスト教を「嘲る」というのでもなく、十字架のイエスという至るべき信仰をはっきりと見据えたうえでの、そこへ至る道程の険しさを改めて見詰めるということではなかったか。そして『おしの』一篇が示しているこういった彼の試みがあつたからこそ、『西方の人』においての「わたしはやつとこの頃になつて四人の伝記作者のわたしたちに伝へたキリストと云ふ人を愛し出した。」あるような、「やつと」という彼の筆の苦さを導いているように思えてならない。

神父は優しい感動を感じた。やはりその一瞬間、能面に近い女の顔に争われぬ母を見たからである。もう前に立つてゐるのは物堅い武家の女房ではない。いや日本人の女でもない。むかし飼槽の中の基督に美しい乳房を含ませた「すぐれて御愛憐、すぐれて御柔軟、すぐれて甘くまします天上の妃」と同じ母になつたのである。神父は胸を反らせながら、快活に女へ話しかけた。

さらにこれと関連して、右のような箇所にも注目しておきたい。キリストの生涯を説く神父が、しのの顔に「すぐれて御愛憐、すぐれて御柔軟、すぐれて甘くまします天上の妃」を、即ちマリアを見出すという事実である。先にも述べたように、小説で芥川はキリスト教信仰の核心に触れさせることなくしのを退場させるのであるが、それは信仰へ至る道の険しさを示したものだと考え得る。そのような中で、ここだとえ「一瞬間」であつても、また結果的に十字架のキリストに背を向けてしまうのだとしても、ここでのしの表情にマリアが重ねられるという事実は、しのの（或いは彼女のみでなく）キリスト教的救済への可能性を微かに覗かせたものではなかつたであらうか。しのと神父の隔絶を通じてキリスト教的救済への道程、その道のりの長さを語つた芥川であつたが、ここでの箇所に窺われるように、その事実を絶望をもつて眺めていたというのではなく、やはり十字架のイエスを深く眼差しながら、救いへ至る可

能性がある確信をもつて見据えていたということができよう。

そしてさらに、十字架のイエスへの眼差しの証左として、小説の結末にも注目しておきたい。

女は涙を呑みながら、くると神父に背を向けたと思ふと、毒風を避ける人のやうにさつさと堂外へ去つてしまつた。瞳目した神父を残したまま。……

先にも触れたところではあるが、ここでのイエスを「臆病もの」だとして、南蛮寺を去つてゆき、そして「瞳目した神父」がそこに残されてゆくというのである。が、しかし、そこに残されたものとは、はたして「瞳目した神父」のみであつたろうか。

ここまでで確認されたように、神父とは『神神の微笑』のオルガンティノの直面した問題を引き継いだ人物であり、唯一の神イエスを説く宣教師であつた。即ち、ここでのしのの退場とは、布教者としての神父の敗北を示すものに他ならないであろう。南蛮寺を「さつさと」去つてゆくのは言うまでもなからうが、ここでの箇所にあつては、神父もまた置き去りにされているのだということである。

つまり、小説末尾において真に眼差されているものとは、頑なな神父なのでもなく、また、イエスを切り捨ててゆくしのでもないものである。小説の書き手は、ここで明らかに神父でもないものを描こうとしている。言うなれば、ここにあつて書き手は、しのの側にも、神父の側にも立つてはいないのである。

イエスを切り捨てるしのでもなく、また頑なに唯一の神を説く神父でもないのだとすれば、小説末尾にあつて真に眼差されているものとは、それは彼らがまさに今まで相対していた、十字架のイエスであり、そこに残された本当の神ではなかつたか。小説冒頭部からの、一貫した南蛮寺内の描写は、まさにそこにある十字架のイエスの存在を想像

させるような役割も果たしていよう。即ち、真のキリスト教の教理を説く神父と、日本的価値観を捨てきれないのという、ある種の相容れなさを描きながら、やはり芥川はその先にある、辿り着くべき十字架のイエスを眼差ししていたのと言えよう。この点においても、やはり『神神の微笑』の時点からの、キリスト教的救いの世界へと接近してゆく芥川の、その在り様を窺い得るのである。

以上のようなことから、『おしの』という小説は、神父としての決裂によって、キリスト教的世界への道のりの陰しさを見詰めながらもなお、ある確信をもって辿り着くべき十字架のキリストを見据える芥川の姿を伝えているという点において、『神神の微笑』以降、真摯に神へと問いかけてゆく芥川龍之介の、その姿の深まりを見出し得る一篇として評価することができるのである。

註(1) 吉田精一『芥川龍之介』(昭和十七年十二月 三省堂)

- (2) 佐藤泰正『芥川と切支丹物——その主題と方法』(『佐藤泰正著作集』④ 芥川龍之介論)(平成十二年九月 翰林書房) 収)
- (3) 稲田智恵子『おしの』(関口安義・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』(平成十二年八月 勉誠出版) 収)
- (4) 芥川龍之介『ある鞭』(大正十五年頃)
- (5) 戴煥『「おしの」——基督教に対する抵抗と愛着のパラドックス』(宮坂覺編『芥川龍之介と切支丹物——多声・交差・越境』(平成二十六年四月 翰林書房) 収)
- (6) 拙論『芥川龍之介『神神の微笑』論——「我我」のキリスト教、その可能性——』(平成二十七年七月「キリスト教文藝」)
- (7) 河泰厚『おしの』(河泰厚『芥川龍之介の基督教思想』(平成十年五月 翰林書房))
- (8) 喜紗玉『芥川龍之介とキリスト教』(平成七年三月 翰林書房)
- (9) 河村清一郎『「神神の微笑」「おぎん」「おしの」など——芥川龍之介の切支丹物について』(昭和三十五年十二月「金城国

文)

- (10) 建田和幸 「「おしの」と「糸女覚え書」——罪と恥の認識をめぐる——」(平成十二年二月「日本文学研究」)
- (11) 関口安義 『この人を見よ 芥川龍之介と聖書』(平成七年七月 小沢書店)
- (12) 樋口紀子 「芥川龍之介『おしの』における信仰——キリスト教的見地から」(平成二十年「梅光学院大学論集」)
- (13) 曹紗玉 前掲書(8)

(おくだ まさのり・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程)